



TITLE:

北京観象臺の沿革に就て

AUTHOR(S):

竹内部隊長

---

CITATION:

竹内部隊長. 北京観象臺の沿革に就て. 天界 1939, 19(220): 177-182

ISSUE DATE:

1939-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167842>

RIGHT:

## 北京觀象臺の沿革に就て

支那の北京の、内城の東南隅に「觀象臺」と呼ぶものがある。甚だ有名なもので、古い支那の天文学を象徵するかの如く、この都市の一つの名所として喧傳せられ、案内記や寫眞エハガキ集には必ず麗々と記述され、遊覽客も多くは其の日程中に此れを見ることを樂しむことにしてゐる。

自分は、かつて、四年前の昭和十年の秋に一度此の觀象臺を訪れたことがあるのだが、今年再び北京に遊んだ時、「事變のため、觀象臺の内外が、何か變つて居るか、どうか？」と、氣にかゝるものだから、去る四月十八日午後、〇〇に駐屯中の竹内部隊長を訪ね、其の厚意によつて、同二十一日に觀象臺を視察した。——門に入つて見ると、敷地内は多少荒れてゐるが、大小の建築物も、外廓なども、殆んど皆、元のまゝで、壁や扉等が幾らか破れてゐるに止まる。しかし、建物の内部は以前に見た記憶と比べると、全く一變し、主として備へてあつた氣象觀測器械等は、皆きれいに持ち去つて、一物も留めない。構内全

部は今〇〇の管理となり、中央の主要な家屋は〇〇〇〇として利用されてゐる。自分は、同行の長男と共に、案内されて、城壁の上に登つて見たが、幸ひなるかな!! 昔の天文器械は全部が元のまゝに安置されてゐる。自分等は、心ゆくまで此の諸器械の細部を観察し、尙ほ、序でに、城壁の上から、今や新しく更生しつゝある大北京の遠近にわたる景觀を眺め、夕刻、辭し去つた。

この日、この觀象臺の保管者〇〇〇氏から頂いた謄寫版刷りのパンフレットが、茲に示す『北京觀象臺の沿革に就て』の一篇である。讀んで見ると、觀象臺の由來と、天文器械の構造を、竹内部隊長の名で誠に要領よく記してある。一見した所、秘密文書ではなく、來觀者の誰にでも配布されるものなので、敢へて我が讀者諸氏に紹介する所以である。(山本)

### 第一 觀象臺の沿革

本觀象臺は非常に古いものでありまして、昭和十四年で丁度七百八十五年の歴史を有するのであります。

抑々北京は遼が之を都としてより金、元、明及清と五朝の都となつた所であ

ります。而して遼の時代には外患多く、内政文化に力を入れることも充分でなかつたので天文事業も發達しませんでした。金の時代に至り宋室が開封に置いてあつた天文測器類を燕京即ち北京に持つて來て海陵貞元二年（皇紀千八百十四年）（即ち西曆一一五四年）今より七百八十五年前近衛天皇の時代）に其内の銅製の渾儀を初めて太史局の候臺即ち此の觀象臺の位置に設置しました。これが此觀象臺の始まりであります。

其後元の代となりまして、初めの中は金の時代のものを其儘襲用して居りましたが、元の十六年（皇紀千九百三十九年）（一二七九年）今より六百六十年前）に太史院に屬する司天臺を此地に建てました。其時代の北京の城壁は其南側が恰も現今の東西長安街の所でありますので此司天臺は城外にあつたのであります。然し明の時代になつて永樂十七年（皇紀二千七十九年）（一四一九年）今より五百二十年前）に城壁を南方に擴げましたので現在地が城内となつたのであります。而して其名を觀星臺と稱へました。

清朝になりまして矢張り從來通り現在地を使用し觀象臺と改名して欽天監

に屬して居りました。

民國になるや之を中央觀象臺と改め教育部に屬して天文、曆數、氣象、磁力地震の業務を行つて居りましたが、其十七年に之等の一切を南京に移し、此地は單に北京の測候所となり下りました。

事變勃發するや番人以外は全部逃亡して居ましたが、昭和十二年（一九三七年）九月二十日竹内部隊が之を占領し、其氣象機關の一部を置き今日に至つたものであります。

## 第二 測器類の沿革

金人が開封から各種の測器類を持つて來ましたときには之を据える場所がありませんので、一先づ測器庫を作つて之に收めて居りましたが、二十餘年後に其中の銅製渾儀（天球經緯儀で現存機衡撫辰儀に類似す）を候臺即ち現在の所に据えたのであります。所が元來開封の地に適する如く作つたものでありますから、緯度にして五度餘り北方に移つて居る北京では其儘使用出來ません。北極星を覘つたときに四度餘り上方に見えたと云ふことであります。其後皇紀

千八百五十六年（一一九六年）今より七百四十三年前の八月に大暴風雨あり、殊に候臺に落雷があつて渾儀が臺下に轉落して破損した事があります。

金が都を南遷するに及び之等を總て河南に運搬しましたので大部分は破損して仕舞ひました。

次で元が北京に都するに及び天文學者の郭守敬は測器皆無なる爲め、新に簡儀、候極儀、仰儀、立運儀、星晷等を造つて整置しました。

明が燕京を攻略するに及び、以上の測器類は總て南京へ運び去りましたが、明の成祖が皇紀二千九十七年（一四三七年）今より五百二年前に北京を北の都と定めましたとき、渾儀、簡儀、渾象、晷表の四器を模造して北京に置きました。其中の渾象（天球儀）は何時失はれたか行衛不明でありますが、其他の三つは事變前迄はあつたそうですが、現在は何處にあるかわかりません。

清朝になつて康熙十三年（皇紀二千三百三十四年（一六七四年）今より二百六十五年前）に新に天體儀、黃道經緯儀、赤道經緯儀、地平經儀、象限儀、紀限儀の六器を製作し、其後四十年程経て康熙五十四年（一七一五年）に地平經

緯儀ゐいを作つくりました。又乾隆九年（皇紀二千四百四年）（一七四四年）今より百九十五年（前）に璣衡撫辰儀（圭表の二器）を作つくり、乾隆十一年（一七四六年）には更に漏壺（水時計）を作つくりました。而して明時代からのものは總て之を臺下（臺上に設置しました。）にして新造の測器類（臺上に設置しました。）。これが現存して居るものであります、其中の漏壺は見當りません。

其後民國（なつてからは各種天體望遠鏡、經緯儀類を備へ、一方氣象器材を備へて天測及氣象觀測をやつて居ましたが、民國十七年）（一九二八年）（今より十年前）其大部を南京に移し、氣象器材の一部を此處に残して居つたのであります。

竹内部隊が此處を占領しました時には氣象器材中破損せる使用に堪えぬもの若干がありました。外は現在の通りで何もありませんでした。

以上

昭和十四年一月

竹内部隊長記す